

追われる恋

、  
眼を開けた。と同時に勢いよく体を起き上がらせた。辺りを見渡すと、そこは見覚えのある墓地だった。私は急いで胸に手を当て人が息を吐く真似をした。よかった。呼吸の仕方、まだ覚えている。今度は立ち上がってみた。体に纏わりつく空気は熱いの、地面はひんやりと冷たい。目線を爪先から体まで移してみた。今の私には走りやすい靴がないし、服もまるで幽霊みたいで可愛くない。でも、今はそんなことを気にしている場合ではない。私はもう一度溜めた息を吐き、暗闇の中を駆け出した。

。目的地はただ一つ。彼に会いたい。私は彼に会えたら死んでもいいとすら思う。

まあ、今生き返ったばかりだけど。

事の始まりは私自身の死だった。人生の終わりが新たな物語の始まりとは奇妙なものだが、どうやら私は20代に突入してすぐに死んだらしい。「らしい」というのは、私には自分が死んだ理由も原因も時も、場所だって記憶にないから。だからこの「らしい」はこの前知らない誰かから半ば強制的に教えてもらったもので（誰かと言っても人かどうか分からない）、それ以上のことは聞く前に断った。

だって、死んだ後にそんなことを知っても意味なんてないでしょう？

死んだ後はどうなるのか？人はよくこんなことを話す。しかし実際に死んでみて分かったが、死んでもどうにもならない。肉体がないため呼吸などの生命活動は無くなり、あとは生前に築いた記憶の中で過ごすだけになる。それは生前にあったビデオテープのようなもので、自分の好きな記憶の中をに入り込むことが出来る。私は好きだった彼との記憶をひたすら繰り返し、何度も何度も彼の姿を眺めた。何度見ても飽きることがないのが不思議だ、いつも思う。しかし、どんなに繰り返し見ても彼には会えない。

死んだことを悔やんだのはこの一点のみだ。

あちらでは私の死後から1か月が経過したようで、以前私の死について教えてくれた誰かが、また改めて私の記憶を訪ねて来た。もしかして、毎月ごとに来るつもりなのだろうか？まるで記念日を祝う恋人のようだと、思わず笑いそうになった。顔が無くて残念だ。私はその誰かがまた私の死について教えてくる前に、記憶の中の彼の元へ戻ろうとした。しかしそれより先に、あるはずのない耳に聞こえてしまったのだ。

「彼に会いたくないですか？」と。

その言葉を聞いた私は俄然興味が湧き、その者の話を聞いてみた。いや、問い詰めたといった方が適切かもしれない。すると驚くべきことに、その者は私を1週間だけあちらへ送ることが出来るというのだ。しかも、自分の望む姿で。

つまり「生き返ることが出来る」Ⅱ「彼に会いに行くことが出来る」という事だ。

その者が何故そんなことを出来るのか。いい話には裏があるのではないか。そもそもそんなことが本当に可能なら、故人を想い人が泣くことはないだろう。怪しい点はいくつもあったが、というより怪しい点しかなかったが、そんなことはどうでもいい。

「彼に会いたい。」

その一言を放った次の瞬間、私は墓地で横たわっていた。こちらへ戻る時方法を聞き忘れたなんて、考える暇もなかった。

こうして今私は生きて、無我夢中で彼の元へ向かっている真っ最中というわけだ。普通ならこんな急展開に思考がついていかないものだが、何分私はせっかちな性格に加えて行動力がそれに伴っていた。生前は良く「考えるより先に体が動くタイプ」と言われていたけど、生き返った今もそれは変わらないみたいだ。

私についてはこのくらいいいだろう。それより、彼について語っておきたい。

彼とは大学入学後、流れるように入ったサークルで出会い、まさに一目惚れだった。切れ長の目、筋の通った鼻、少し大きめの唇。そのどれもが私の理想通りで、以降彼から目が離せなくなった。彼はよく目を細くして、口を大きく開けて笑っていた。彼の笑顔に惹き付けられるかのように、彼の周りにはいつも人がいた。もちろん私もその一員だった。

気持ちを抑えきれなかった私は、彼と出会って3日後に告白して、

あっさりと、振られた。

冷静に考えれば当然のことだ。出会ってまだ間もない、しかも数回しか話したことのない女から告白されても「誰だっけ？」となるに違いない。でも、恋する女は冷静でないものだ。彼とは同じサークルなので、ほぼ毎日顔は見えるし、話そうと思えば話も出来る。振られてからしばらくの間は諦めがつかずに再び告白してみたり、無理矢理接近しようと行動してみたがどれも上手くいかなかった。

なので結局、私はひっそりと彼を想い続けることにした。

彼を想い続けてからの約1年間は幸せな時間だった。

彼のことをもっと知るために彼の後ろを歩いて毎日デートしたり、カメラで沢山の素敵な笑顔を収めたりと充実した日々だった。こっそり彼の部屋にお邪魔して驚かせたこともあったつけ。どれも2人のいい思い出だ。

しかし幸せは突然途絶えた。記憶にはないがなんとなく、本当になんとなく私は誰かに殺されたのだと思う。自分の死についてだけは自分の記憶から確認できない。もし知りたければ、きつとあの誰かさんに教えて貰うことが出来る。逆に望まなければ知ることはない。よく分からぬが、あまり自分の死を受け入れたくない人もいるみたいで、そこらへんは配慮されているようだ。何故か私の死に執着している誰かさんは例外みたいだが…。

彼の元まであと少しという辺りでぽつぽつと小雨が降ってきた。当然傘なんて持っていない私は濡れながら走り続けた。だんだんと胸が苦しく、足も痛くなってきた。一度呼吸を整えなければいけないが、これがなかなか難しい。深呼吸という方法を思い出して必死に呼吸をする。その間も私は決して足は止めなかった。

彼の住むマンションが見えた。彼の部屋は2階の一室にある。他の部屋はもう暗いの、そこだけうっすらと灯りがついている。それを見ると「まだ起きているんだ」、「私の帰りを待っていてくれたんだ」、「はやくあの笑顔を見たいな」と次々に思いが溢れてきた。

やっとエントランスの前まで来て、ふと悪戯心が芽生えた。こっそり家に入ったら、彼の驚いた顔も見れるのではないか？我ながら最高のアイデアだ。今にも押そうとしていたインターホンから手を離し、私は別の入口へ移動した。たしか、前にお邪魔した時のあのベランダから入ったな。

それにしても、ここに来るまでに随分と汚れてしまった気がする。鏡がないから身だしなみを整えられなかった。きつと雨のせいで顔も服もぐちゃぐちゃ。まあ、どんな姿でも彼は喜んで受け入れてくれるに違いないけど。雨で滑りやすくなった柵をよじ登りながら、私は思考を巡らせていた。㍻

ベランダを何とか登りきると、カーテンの向こう側に人影が見えた。私は嬉しくて思わず彼の名前を呼びそうになったが、その前に人影が少し動いた。私には、“そいつ”が彼でないことはすぐに分かった。だって、彼の髪はあんなに長くない…。

そいつを認識した瞬間何とも言えない不快な感情が湧き上がり、気づけば私は窓ガラスを叩き割って部屋に入り込んでいた。

中に入るとそこには髪の長いそいつと驚いた顔の彼がいた。驚いたのは私の方なのに何故彼が驚いた顔をしているの？サプライズはお互い様ってこと？もうほんと、最悪な気分。

「その女、だれ？」

私は彼に尋ねた。私が死んで寂しかったからといって、もう新しい彼女を作ったと言うの。

「な、なんで…お前、死んだはずじゃ…なんで…。」

気づけば彼の表情は驚きから恐怖へと移り変わっていた。違う、私が見たいのはそんな顔じゃない。私は一歩ずつ彼に近づく。

「だれ？だれなの？私のことはもうどうでもいいの？」

怯えた彼はソファに座っていたそいつに近寄る。そいつは彼に寄り添う。まるでカップルのように。私はもう我慢の限界だった。ずるい、ずるい、ずるい。

私は少しの間答えを待ったが、彼は怯えるばかりだった。彼の代わりにとも言うように、隣のそいつが口を開く。

「もしかしてあなた、以前彼が悩まされていたストーカーですか？こんな夜中にいきなり窓から入ってくるなんて、何が目的なんですか？もう彼を苦しめないで！これ以上ここに居座るなら警察を呼びます。早く出て行って！」

女は、私とは似ていて非なるタイプだった。普通ならありえない状況にも関わらず勇ましく、堂々としている。警察を呼ばれることは構わなかったが、私は女の態度に驚き、彼の態度に失望した。

ストーカー？言っている意味が分からない。

目的？私はただ、彼に会いたかった。そしてもう一度笑顔を見せてほしかっただけ…。

私は何か間違っているのだろうか？

もう何も考えることが出来なかった。彼に期待していたことは何一つ起きず、むしろその逆ともいえる仕打ちに合った。苦しめていたつもりなんてまるでなかったが、彼の中で私は不幸な存在だったらしい。そんなことを知ってしまったら、もうそこには居座れなかった。私はきつと未だに怯えているであろう彼の顔も見れないまま、玄関から外へ出た。

エントランスからさらに外に出ると、雨は鬱陶しさを増していた。私はもう歩く気にもなれなかった。というか、死にたくなってきた。

生きる理由はもうないのに、一週間も生きている意味などない。

「はやく死んでまた記憶の中の彼に会いたい」という一心で、私は重い足を交互に動かした。もう行く宛てはどこにもない。

身体的にも精神的にも流石に疲れがやってきたようで、私は彼の家から少し離れた電柱の傍でしゃがみこんでしまった。

このまま瞼を閉じるのも悪くはないかもしれない。再び目が覚めたらまたあちらに戻っていてほしいな。そんな風なことをうつすらと考えながら、私は瞼を閉じた。

瞼を開けた。知らない天井が見える。私は驚き飛び起きたが、それに呼応するかのように体の筋肉が悲鳴を上げた。

「いっつたい！」

痛みあまり、口からも悲鳴が出てしまった。あの墓地から彼の部屋まではかなり距離があった。その間を休むことなく走り続けたのだから、筋肉痛になるのも当然だ。

私はその痛みによって自分がまだ生きているということに気が付いた。

私が悲鳴を上げてすぐ、誰かがドアを開けて入って来た。

「えっ！大丈夫ですか？どこか痛みますか？」

首の痛みで上手く相手の顔を見ることが出来なかったが、声から想像するに、恐らく同じ年くらいの男性だろう。

警戒心が解けていない私は、返事の代わりに小さく頷いた。この人は誰だろう？

「なら良かった。すぐ大きい悲鳴だったからびっくりしちゃいました。あ、いきなり入って来てしまってますみません。」

今の私の心には相手の話を聞く余裕もなかった。私は我慢できずに尋ねた。

「あの、どなたですか？どうして私はまだ生きているのでしょうか。」

相手は一瞬驚いた気配を見せたが、その後すぐ質問に答えてくれた。

「あ、失礼しました。いきなり話しかけられても混乱しちゃいますよね。僕は決して怪しい者ではありません。昨晩大雨の帰り道であなたがしゃがみこんでいるのを見かけて、思わず家に連れて帰って来てしまいました。調子はいかがですか？」

なんて親切な人だと思ふ反面、帰り損ねたという気持ちも強かった。

「そうだったんですね。色々あって帰る場所が分からなくて…。助かりました。ありがとうございます。体も筋肉痛以外は大丈夫そうです。」

そう言っ私は外に出ようとした。しかし、足元がふらついて上手く歩けない。

「大丈夫ですか、やっぱりあんな雨の中に居たら風邪ひいちゃいますよ。もし良ければ、しばらく家で休んでいてください。あ、お風呂も好きに入ってくださいね。髪を乾かしておくことくらいしか出来なかったの…。僕も一人暮らしで退屈ですし、是非のんびりして行ってください。」

そう言っ彼は再び私をベッドへゆっくりと寝かせてくれた。

「ありがとうございます。」私はそう言いながら横目に彼の顔を見た。

何という偶然か、その顔は私の大好きな“彼”のものだった。

私はもちろん大いに混乱した。目が回り、脳みそまでも回った。当の本人は、私が混乱していることも知らずに「どういたしまして。」と微笑んでいる。微笑んでいるのだ。

私は彼の顔から目を離すことが出来なかった。切れ長の目、筋の通った鼻、少し大きめの唇。異なる点と言えば声と部屋の趣味くらいだろうか。

「あの、顔、顔が……。」

上手く言葉を出せない。ころころと変化する感情に追いつけていない。

「？僕の顔、何か変ですか？」

私は筋肉痛のせいかもしれない、震える腕で彼の顔に手を伸ばし、気づいた時には眠ってしまった。

再び目を覚ますと外はすっかり夕方になっていた。カーテンの隙間から夕陽が差し込んでいた。まだ体の倦怠感は抜けきらないが、先ほどよりは随分とマシになっていた。

あれは夢だったのだろう。私の大好きな人が、この世に二人もいるはずがない。

そう考えているとタイミンク良くノックの音がした。

「起きてますかー？お粥作ってきたので少し中に入りますねー。」

私が答える前に彼は入って来た。視線を顔に合わせる。幸か不幸か、夢ではなかったようだ。

「あ、やっぱり起きてたんですね。物音がしたからそろそろかかって思っていました。」

彼はそう言くと、ベッドの横の小さな机にお粥を置いた。お粥には、私の大好きな梅干しが乗っている。

「これ食べられそうですか？無理せずゆっくり休んでくださいね。」

どこまでも優しい彼。もしかしてここに居る彼が私の好きな彼で、昨日の彼の方が夢だったのではないか？だんだんとそんな風に思えてきた。

お礼を言って私はお粥を一口だけ口に入れた。熱いけど、これ以上ない程にとっても美味しく感じた。

お粥を食べて元気になった私は、彼と沢山話をした。話を聞くと、彼も最近失恋したらしい。

「失恋した同士仲良くしましょうね。」最後にそんなことを言って彼は部屋から出ていった。

次の日もその次の日も、彼と私は共に時間を過ごした。話だけでなく一緒に映画を見たり、ゲームをして楽しんだ。どれも幸せな時間だった。

気が付くと、あんなに死にたいと思っていた感情はとくに消え去っていて、むしろもっと彼と居たいと思うようになっていた。しかし、5日目辺りで気が付いてしまった。

私はもうすぐ帰らなければいけない。

6日目。私は朝からずっと暗い表情を浮かべていた。彼ともっと生きる方法はないのだろうか。そんな無謀なことを考えながら彼と話していると、彼が不安そうな顔で聞いてきた。

「僕と話すの飽きちゃった？」

私は慌てて否定した。

「そんなわけない。すごく楽しいし、ずっとこうしていたい。」

私は言いながら泣きそうになった。実際彼と話すのは本当に楽しい。趣味や物事への興味、好きな食べ物まで驚くほど似通っていて、飽きることがない。

「じゃあどうしてそんなに悲しい顔をしているの？」

これには、答えられなかった。「これから死ぬから」なんて言えるわけがない。

結局最後の夜まで、私達是一緒にいた。すっかり元気になった私は彼に何度もお礼を言い、部屋を出た。彼は「もつといいもいいよ」「連絡先だけでも教えて」「君の家まで送るよ」と気にかけてくれたが、私はすべて断った。さようなら、どうかお元気で。

夏の深夜、私はあの時のように暗闇の中を走った。今度は墓地に戻るために。墓地までの道のりは彼から教えて貰っていたので、あとは走るだけだった。途中で転んで膝を擦りむいてしまった。この痛みももう直無くなると思うと、少し感傷的になる。

墓地に着くと既に門が閉まっていた。しかし私には関係のないことだ。比較的低めの門を乗り越えて、最初に自身が横たわっていた場所を探す。

そこは墓地の隅っこだった。墓をよく見ると私の名前が彫られていて、綺麗な状態で保たれている。そういえば、家族にも会いに行けばよかった。今になってつくづく自分の頭の中には彼しかなかったのだと実感する。

もうすぐ日が変わる。肝心の帰り方が分からなかった私は、また地面に横になってみた。今の私は彼に貰った綺麗な真っ白の服と、可愛い水色のサンダルを履いている。この可愛いらしい姿で“彼”に会いに行ったら、結果は違っただろうか。

きつとそんなことはないともう分かっていた。

瞼を閉じる。と同時に私は再び灰に戻った。



彼女を見ていると本当に心が癒される。すやすやと眠る彼女の横顔を見ながら僕は思った。彼女は約1週間前に僕の家に来た。もちろん、雨の中小さくしゃがみこんでいる姿も可愛かったが、大好きな人に風邪なんて引かせられない。(結果的には引かせちゃったけど) ベランダをよじ登るなんて無茶ばかりしなければならないのに…。

まあ、そんな所も愛おしいけどね。

彼女と出会ったのは大学入学後に何気なく入ったサークルだった。ぱっちりとした丸い目に、小さい鼻、潤った唇。可愛らしい見た目に反した大胆な性格に、僕は惹かれてしまった。でも、彼女は好きな男が出来たようだ。

「出会ってからたった3日で告白した女」とサークル内では一時期噂になっていた。噂を流したのは告白された張本人で、僕は彼の性格が悪いことを知っていた。しかし彼女はその後、彼を見続けていた。僕を好きになってくれれば必ず幸せにするのに。そんなことを願っても彼女の綺麗な瞳には終始彼しか映っていなかった。でも、それでもよかった。

僕は彼女を密かに想い続けることにした。彼の後を追う彼女の後を追ひ、彼女の好きなものや嫌いなもの、身長、体重、生活リズムまで全て知り尽くした。知れば知るほど彼女に惹かれていった。

しかし、一年経って突然彼女は殺された。犯人はサークル内の女だった。彼に纏わり付く彼女が憎かったらしい。そいつは捕まって刑務所に行った。でも僕はそいつを生涯許せなかったし、彼女のことをずっと見ていたくせに、肝心な時に目を離していた自分も許せなかった。

だから、また彼女の後を追ってみた。

そこに行くとは僕の記憶の中には彼女が沢山いて、共に、幸せに過ごすことが出来た。

僕は彼女に会えたらなと思いつながら何度も記憶を眺めた。

ある時、こちらの住民に彼女らしき者がいると知り、僕は大喜びした。「彼女に会える！」そう思ったが彼女の興味のありそうな話は、彼女の死についてくらいしかなかった。会いに行ってみると、その者は確かに彼女だった。僕は高揚感を抑えながら、早速彼女に自身の死について教えてあげようと思った。しかし、彼女は死んでも尚、彼のことにしか興味がなかった。

僕は悔しかった。こんなに想っているのにどうして一度もこちらを見てくれないのだろう。僕はそこでやっと気が付いた。

僕が、“彼”じゃないからだ。

その後、僕は生き返るための方法を必死に探り、1週間だけ生き返ることが可能になった。彼女を呼び寄せ、彼に会えることを仄めかしてみた。思った通り、彼のことになる。彼女は話を真剣に聞いてくれる。少し悲しかったが、彼女とほとんど初めてちゃんと話せたことに僕は喜びを覚えた。

そして彼女が願ったと同時に、彼女を生前の姿のままであちらへ送ってあげた。希望を言われる前に送らないと、彼女の生きている姿が見られなくなってしまうからね。

僕はというと、“彼”の姿を望みあちらへ向かった。彼女を保護するための部屋は、かつての親友に事情を説明して1週間だけ貸してもらった。

あいつも最初は気味悪がってたけど、最後には分かってもらえて、僕は嬉しかったよ。

あちらでは彼女が真っ先に“彼”の元へ行くのは言うまでもなかった。だから後から向かった僕は、彼女の姿を見守っていた。奮闘の結果、案の定部屋から追い出されて、傷心中の彼女を家に連れて帰った。僕たちはこの世で最も幸福な1週間共に過ごした。それにしても、僕の顔を見た時の彼女の反応はたまらなく可愛かったなあ…。

最期の夜、彼女はとても寂しそうな顔をしていた。「これから死ぬ」なんてこちらの人に言えるわけないもんね。僕だって寂しかったが、でも大丈夫、僕らはまた会える。

最後の最後に、何も知らないフリをするために白々しく引き留めてみたりもした。

彼女を見送った後、すぐに後を追った。途中で転んだ彼女を見て声をかけようか迷ったが、彼女は一人で起き上がり、すぐさま立ち去った。彼女は相変わらず足が速い。

僕が遅れて墓地に着くと、彼女はもう先にあちらへ戻っていた。何も教えていないのに、僕の彼女は流石などと感心した。(墓地の場所を話題にしてヒントを出したことはあるが…)見ると彼女の墓の前には、僕がプレゼントしたワンピースとサンダルが無造作に置かれていた。

これこそ彼女がこちらに存在していた証明だ。

僕はそのワンピースとサンダルを抱きかかえて、再び彼女の後を追った。

